

〈研究ノート〉

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

— 島小の女教師の自立の過程 —

高井良 健 一

Abstract

I explored the latter half of one woman school teacher's life and career by life history method in this paper. Her name is TAMAKI KAWASHIMA. In her twenties, she worked with KIHAKU SAITO in Shima primary school in Gunma Prefecture.

She moved to Tokyo from Gunma in 1965. She had good practices in the first primary school in Tokyo. However she was taken a disease in the next primary school in her forties. She struggled against her disease for about ten years. At last she could recover her health by an elder woman doctor's support. Just after a recovery from the disease, her mentor, KIHAKU SAITO died. Thereafter she has felt a strong sense of responsibility to teach and care young colleagues. In her fifties, she tried to explore drama education and literature education. She retired from teaching profession at the age of sixty in 1993. Her last lesson study was about the lesson of "HARU", a poem which describes a poor mother in the rural area. She would like to impress the love of mother on the children who would be adolescence soon.

She was a primary school teacher from 1956 to 1993. In the latter half of her life, the severe disease made a critical turning point of her career. She got a new perspective from her disease and became more compassionate teacher for children as well as colleagues.

はじめに

前編で叙述したように、川嶋環（旧姓：児島環）は、1933（昭和8）年、群馬県佐波郡伊勢崎町（現：伊勢崎市）にて生を受け、群馬大学卒業後の1956（昭和31）年に、群馬県佐波郡島村にある島小学校（以下、島小）に新任教師として赴任した。そこで戦後日本の教育

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

実践において金字塔を打ち立てた斎藤喜博校長の薫陶を受け、7年間にわたって授業づくりの指導を受けている。斎藤校長が異動したあとも2年間は島小で教師を務め、合わせて9年間の歳月を島小で過ごしている。夫で写真家の川嶋浩が東京を拠点としていたこともあり、川嶋は、1965（昭和40）年からは東京都の小学校教師として、新たな教職生活に踏み出し、都内の小学校で1993（平成5）年の定年退職まで勤め上げている。

このように群馬と東京での教職経験をもつ川嶋は、インタビューのなかで、自らの教職生活を振り返って、次のように語っている。

「だから私が自分の教師生活の、この中で考えると、四期ぐらいに分かれるかなあ」（③
66頁）

斎藤喜博校長の下で過ごした島小時代が第一期、東京都新宿区に移ってからの四谷第三小時代が第二期、東京都三鷹市に異動してから病気に苦しんだ時代が第三期、そして斎藤喜博が亡くなったあと、三鷹の小学校で自立して教育実践を立ち上げた時代が第四期。これが川嶋自身による教職生活の時期区分である。この区分で考えると、研究ノートの前編では、第一期と第二期の前半の歩みを叙述したことになる。

その前編でも述べたように、新宿区の四谷第三小時代は、島小で斎藤喜博に鍛えられた授業と子ども理解で対応することが可能だった。つまり、この時代は、まだ島小の延長にあったといえる。仕事と子育ての両立で大変な毎日を送りながらも、この頃の川嶋はまだ若く、体力もあったから、無理が利いた。時には睡眠時間が2、3時間の日もあったが、持ち前の負けず嫌いの性格で自分を奮い立たせて、踏ん張ってきた。

ところが、新宿区から三鷹市に異動してから体調が思わしくなくなる。ほぼ女手一つで子どもを産み、育てながら、教師としても妥協することなく懸命に学んできた若い頃からの積み重なった心労がここに来て表面化したといえる。そして、この不調は、ずっと全力投球で教師の仕事に向き合ってきた川嶋に対して、生き方の変容を促す人生のサインでもあった。斎藤校長の厳しい指導にも決してへこたれなかった気丈な川嶋にも、四十代に入って、いずこからか中年期の危機が忍び寄ってきていた。

それでは、川嶋は、この危機に対してどのように立ち向かい、この危機を通してどのような変容を遂げたのであろうか。今回、川嶋環のライフヒストリーの続編で綴るのは、第二期の後半から第三期、第四期に至る川嶋の教職生活の危機と再生の物語である。

（インタビューの引用は、②が2014年3月31日に行ったもの、③が2014年4月18日に行ったものである。どちらのインタビューも杉並区永福町の川嶋の自宅で、筆者と川嶋の対面で行っている。）

(略年表②)

西暦(元号)年	節目となる出来事	備考・時代背景
1972(昭和47)年	東京都新宿区四谷第三小学校 5年生担任 次男出産	沖縄返還 日中国交回復
1973(昭和48)年	東京都三鷹市高山小学校 声帯ポリープ手術	第一次オイルショック
1974(昭和49)年		
1975(昭和50)年		第一回サミット
1976(昭和51)年		ロッキード事件 新自由クラブ結党
1977(昭和52)年		
1978(昭和53)年		第二次オイルショック 日中平和友好条約
1979(昭和54)年		スリーマイル島事故 共通一次試験開始
1980(昭和55)年		イラン・イラク戦争
1981(昭和56)年		斎藤喜博逝去
1982(昭和57)年		
1983(昭和58)年		
1984(昭和59)年	4年生担任	日本電信電話公社民営化 臨時教育審議会設置
1985(昭和60)年	5年生担任	ブラザ合意
1986(昭和61)年	6年生担任	チェルノブイリ事故
1987(昭和62)年	4年生担任	国鉄民営化
1988(昭和63)年	東京都三鷹市立三鷹第一小学校 担任	リクルート事件
1989(平成元)年	担任	消費税導入 天安門事件 ベルリンの壁崩壊
1990(平成2)年	担任	ドイツ再統一
1991(平成3)年	担任	バブル崩壊 湾岸戦争 ソ連解体
1992(平成4)年	5年生担任	新学力観・生活科
1993(平成5)年	6年生担任 「春」の授業 定年退職	細川内閣成立

(一) 声帯にポリープ

川嶋環は気持ちも強いが、身体も強い教師であった。小学校6年生の時に今のままの成績では進学は難しいと言われたとき、これからは他人の2倍勉強しようと決意したのだが、こ

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

れを可能にしたのは、生来の負けず嫌いの性格とともに、人並み以上の体力であった。大学時代にはスキーで鍛えており、多少の無理にはびくともしない身体をもっていた。そのため、初産の時は、出産予定日の一ヶ月前にもかかわらず、島小で研究授業を行っている。そこで「とても良い授業だった」（② p. 158）と褒められたものだから、もっとやりたいと申し出て、斎藤校長にこっぴどく叱られたという。自分のことだけ考えずに、病気の人、つわりのひどい人、周りの人のことを考えるように、ということだった。こんな調子だから、まさか自分の身体が思うように動いてくれない事態に遭遇するとは、夢にも思っていなかった。

「私ね、あの、生きるか死ぬかっていう病気したことあるんですよ。」（② p. 251）

1973年（昭和48）年、この年に40歳を迎える川嶋環は、東京副都心にある新宿区四谷から、郊外にある三鷹市の小学校に異動した。この頃、三鷹市は15万人の人口を擁する東京のベッドタウンとなっていた。自宅のある永福町と同じく井の頭線沿線に位置する高山小学校に赴任した川嶋は、この小学校にて思いもかけない十数年間を過ごすこととなる。

「今度は、三鷹へ移って、大病したんですよ。」（③ p. 67）

この時、川嶋は二児の母となっていた。島小時代に生まれた長男に続いて、1972（昭和47）年に次男を授かったのである。40歳近くでの出産ということで、この時期としては比較的高齢であった。三鷹市の小学校に異動したときは、次男がまだ1歳であり、出産、育児、仕事と無理がたたったのであろう。4年生の担任となった川嶋の身体には、ある異変が生じていた。

病院での検査の結果、声帯にポリープが見つかった。そして、三鷹1年目の夏休み、斎藤喜博が主催していた教授学研究会の淡路島合宿から戻ってきたタイミングで、手術を受けた。だが、この手術は、不幸にして、失敗に終わり、川嶋は声を失ってしまう。声帯が閉まらなくなったのである。それからは、休職、少し良くなると復帰、悪化して再び休職ということを繰り返す日々が続くこととなった。この間、学校を休んだ総時間数を累計すると、2年間ほどになったという。

（二）どん底の生活

新宿区の四谷第三小学校では、川嶋が「なんかやると認められる」（③ p. 68）というように、「島小で、徒弟制度みたいな、力をつけてもらったのがベースになって」（③ p. 68）充実した教職生活を送ることができていた。四谷第三小学校は「一学年二学級」（③ p. 70）の

落ち着いた小規模校で、「職員間のトラブルって全くなかったです」(③ p.65)と語られているように、安定した学校だった。この地域もまた、学区内に公務員住宅を有する落ち着いた地域で、教育熱心な保護者が多かった。教育熱心なあまり、あるときには、川嶋の教育方針に対して保護者からクレームが出されたこともあった。しかしながら、そのようなときも、道理を尽くして話をするならば、理解してくれる保護者たちであった。

ただ、島小と違って、四谷第三小学校では、「学校へ来ると、子どもの顔が輝いてない(中略)で家に帰ると、輝いている」(③ p.70)ということは感じていた。島小の子は「家に帰ると田舎の子で(中略)学校来ると、ばーって輝いている」(③ pp.70-71)というような、教師冥利に尽きる子どもたちだった。この語りは、戦後10年前後という時代、農村地帯という地域環境が、島小の教育のバックグラウンドにあったことを物語っている。

ともあれ、四谷第三小学校では、恵まれた職場環境と理解のある保護者たちにも支えられて、川嶋は、平安な教職生活を重ねることができた。ここで30代の8年間を過ごした川嶋は、40歳という節目の年に、自身三校目となる三鷹市の高山小学校に異動することになったのである。

三鷹市の高山小学校に異動し、赴任した時にも、川嶋は保護者たちに歓迎された。決して若すぎもせず、それでいてまだ十分に活力がある40歳という年齢は、教師としての経験と活力のバランスにおいて絶頂期にある時期である。しかも、川嶋は、島小で鍛えられた高い授業の技術と教科の知識を備えていた。そして、教授学研究会や極地方式研究会に参加し続けるなど、教師としてより高みを目指して学び、向上する意欲も旺盛であった。大切な我が子を任せる保護者たちも、教職生活18年のキャリアをもち、仕事への意欲も高い川嶋に、安心感とともに期待感をもったにちがいない。

ところが、何とということか、川嶋は、40代に差しかかり、教師としてこれから大きく飛躍するという時期に、突然、声を失ってしまったのである。言葉で勝負する教師にとって、声を失うということは、致命的ともいえることであった。

この突然降りかかってきた思わぬ病気とのたたかひのなかで、川嶋は、「学校はもう責任があるからやるけど」(③ p.138)、すっかり「家のことやる意欲はなくなって」(③ p.138)、抜け殻のようになってしまった。本来ならば、公私ともに充実した活動が期待できる時期に、川嶋は、声を失ってしまったことで、さまざまな活動への意欲を失ってしまったのである。このような状況となっても、経済面でも、家庭生活においても、プロのカメラマンとして仕事に没頭する夫はあてにできなかった。したがって、川嶋が、何とかして教師として踏ん張り、何とかして二人の子どもたちを守り、育てるしかなかった。

もしもこの時、夫が安定した職業に就いていたら、「[教職を]辞めてたと思います」(③ p.151)と、川嶋は当時を振り返っている。実際、長姉から自分自身の子育てがきちんとしてきているかどうかを心配されることもあった。川嶋自身、自らの体調不良のため、十分な世

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

話を受けることができなかった「息子なんか、かわいそうでしたよ」（③ p.139）と子育て時代の大病との葛藤を慚愧の念とともに振り返っている。家族四人揃っての一家団らんなど、夢のまた夢だった。成長して今はともに教師になっている二人の子どもたちもまた、この期間、病気の母親とともに大変な苦労を重ねることとなったのである。

多くの場合、病気は、何らかの変調のシグナルとして生じるものである。一つの病気が、何の脈絡もなく、突然、あらわれるということは、ないとはいえないものの、稀なことであり、多くの場合、病気には何らかの前触れや予兆があったり、病気にいたるプロセスが存在する。声が出なくなったのは、手術の失敗のためであるが、その前に、声帯にポリープができたのは、一体なぜだったのだろうか。あるいは、声を出すことが難しくなるような、何らかの出来事が、その背景に存在していたのかもしれない。

そのように考えた筆者は、この大病の背景にはどのような出来事があったかを探ることとし、その手がかりを、当時の川嶋の文章に探ってみた。すると、この当時、川嶋が、次のような文章を綴っていたことが明らかになった。

（三） 喧噪のなかにある学校

この年の四月に41歳を迎えた川嶋の文章には、新しい学校での戸惑いが描写されている。

「今年（四十八年）四月、私は三鷹市立高山小学校に転任した。私がいままで経験した、島小の子どもたち、四谷第三小の子どもたちとまったくちがった子どもたちである。

朝礼がはじまって新任の先生が朝礼台の上にあがっても、がやがやしていて挨拶ができないほどである。教室に入ってもたえず、わさわさしている。授業中、ちょっと姿が見えないなと思うと、便所へ行ったり水飲み場で遊んだりしている。私の話の途中で、ひやかすようなことをいう。授業がはじまって、自分の席にはつかないし、もちろん自分から教科書を出すような子はいない。朝から下校するまで校舎の中は、足音、大声、机や椅子を動かす音、などで騒音のるつぽにいるようである。

こんな毎日が続くと、私はすっかり疲れきってしまう。六月ごろには子どもたちの顔を見るのもおそろしいという気持ちになってしまった。」（川嶋環『創造する授業Ⅱ—島小を離れて』一荃書房、2016、pp.23-24）

文章はここで終わってはならず、その後、子どもが見せてくれたやさしさのエピソードが語られているのだが、続いて「こんなひとりの子のよさが、学級の中ではまったくかきけられてしまう」（前掲書、p.25）とあるように、これまで経験したことのないような喧噪のなかで、川嶋は、教職生活における大きな危機に直面していたのである。

このあと、ほぼ10年間、川嶋の教育実践記録は空白の時代を迎える。この10年間は、声の出ない病気を患っていた10年間とちょうど重なっている。そして、奇しくもこの10年間は、1973年から1983年という日本社会が高度経済成長の終焉を迎えて低成長に入る時代と重なっていた。また、この時代は、日本の学校教育が量的拡充を実現する反面で、不登校、いじめ、校内暴力などの教育病理が噴出した時代でもあった。

教師の仕事は感情労働である。島小、四谷第三小で、子どもたちとの心の通い合う授業を創ってきた川嶋にとって、授業において、子どもたちとの学び合いが生み出せないことは、深刻な問題であり、大きなストレスであった。喧噪のなかで、心ならずも、川嶋自身、大声を上げて叱ることもしばしばあったことだろう。しっとりとした学び合いが成立せず、一日中、喧噪と怒号が飛びかう教室に身を置きつづけることを強いられるならば、子どもたちの身体と心に異変が起きるのはもちろんのこと、教室でその職業生活の大半を過ごす教師たちの身体と心も蝕まれる。このように考えると、この時期、川嶋の声帯にポリープができたというのは、決して単なる身体的な疾患ではなかったように思われる。

時代の変化、地域の変化、そこで生じる保護者の苦悩、子どもたちの育ちの難しさが、学校にも押し寄せてきていた。その波を、新しい郊外の学校で、教師として一身に引き受けようとしていた川嶋の身体は、音を上げていたのである。大都市の郊外の学校が抱える難しさは、純粋な農村部にあった島小や成熟した都市部にあった四谷第三小とは、また質が違うものであった。

結局、川嶋は、この時期、病状が悪化すると休職をせざるをえず、小康状態の時には、マイクをつけて教室に戻るとい生活の繰り返し。このような状態が10年近くも続き、川嶋は、再度手術を受けることになった。ところが、今度は、手術を終えて、身体機能的な問題は解決したはずだったが、精神的な問題により、手術後も、どうしても声が出ない状態が続いた。まさしく、40代の川嶋の生活は、ただひたすらに暗闇のなかをながく生活であった。そして、その暗闇の先には出口があるどころか、八方ふさがりの行き止まりだったのである。

(四) 命の恩人

この時に、まさに命の恩人となったのが、川嶋と同郷の群馬県出身の女性医師であった。彼女は川嶋よりも7、8歳年長の凜とした女性であった。川嶋を診察したほかの医師たちが、精神的な問題なのだから早く仕事に復帰するようにと促すなかで、ただ一人だけ、全く反対に、精神的な問題なのだからしっかりと休みなさい、と諭し、医師としての矜恃をもって、診断書を書いてくれた。川嶋が、女性医師が患者の生活を配慮した診断書を書くことで、「先生、医師の免許取り上げられるんじゃないですか」(③ p.145)と心配したところ、女性

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

医師から「あなたは、子どもの前で、死ぬ覚悟があるぐらいの気持ちで、授業しますか」（③ p.146）と問い返されて、自分はそのぐらいの覚悟で患者と向き合っているという思いを告げられたという。この女性医師が何度も診断書を書いてくれたことは、もう一度教壇に立って、子どもたちの学びを引き出したいと願っていた川嶋にとって、暗闇のなかの一筋の光だった。この時出会った女性医師が、回復に至るまで川嶋を支えてくれたおかげで、川嶋は教職生活を継続することができたのである。

この後、何とか小さい声は出るようになり、川嶋は、マイクを使いながらも、教壇に立つことになった。教師にとっての生命線ともいえる生き生きとした声を失ったこの時期は、川嶋にとって、とにかくつらい時期であった。新任期に斎藤喜博に教わって以来、ずっと教育実践記録を執筆してきたが、先述のように、この時期の教育実践記録は、空白となっている。

それでも、救いとなったのは、学校の管理職や保護者が、病気の川嶋を応援してくれたことである。この間も、保護者たちは、「先生早く復帰してください、復帰してください。」（③ p.148）と川嶋を励ましてくれたという。川嶋の40代は、停滞と苦しみのなかにあったといえるが、「昔の親はよかったんですよ」（③ p.148）と振り返るように、親たちは教師を温かく見守っていた。子どもたちの生活世界は大きく変貌し、その生活感覚は変わりつつあったが、親の世代は、川嶋と同じように、戦時下から戦後にかけての多くの人々が貧しかった時代の苦労を共有し、おおらかさのある戦後の新教育を経験した世代であった。病気で苦しんでいる同世代の教師を支えようという思いは、たしかに存在していた。そして、その地域は教師を支えることができる質の高い共同性をもった地域だったといえるだろう。

その後、川嶋が小さな声しか出せない状態から少しずつ回復しつつあるときに、同僚の「すごく面倒見のいい先生」（③ p.148）が、「[学年の]3人がとてもいいから、4年[担任]を希望だしな（中略）私たちが面倒見るから」（③ p.148）と声をかけてくれた。温かい保護者たちとともに、この学校には支え合う同僚性も備わっていたのである。その子どもたちを6年生まで持ち上げて担当するなかで、川嶋は体調を取り戻し、再び教育実践記録を書き始めるようになる。この時に担当した子どもたちは大変活発な子どもたちで、川嶋は子どもたちに島小で教わったいろんな歌を教えたり、野外劇の「八郎」を演じさせたりするなど、表現活動に力を入れた。

このように表現活動を中心として、子どもたちを育てていった結果、6年生になった時には、子どもたちが、先生に決められたものではなく、自分たちで選んだ題材で劇をやりたいと主張するまでに育っていた。江戸時代の百姓一揆を題材とした「小○の旗」（こまるのはた）を推す子どもたちに対して、教室にその時代その時代の政治状況を持ち込むのを嫌っていた川嶋は、「走れメロス」と「孫悟空」を提案し、この三つの中から一つを選ぶ投票を行った。しかしながら、子どもたちは、川嶋の思いを忖度するのではなく、自分たちの考えを貫いて、「小○の旗」を選んだ。この結果を見届けた川嶋は、子どもたちの自立心をくすぐ

るかのように、「[あなたたちが自分で決めたのだから] 私は手引いたよ」(③ p.163)と子どもたちに告げて、劇の運営を子どもたちに任せて、自らは縁の下の力持ちに専念することにした。その時、子どもたちは自ら脚本係、舞台係、照明係、監督を決めて、劇のすべてを自分たちで創り上げたのである。

学校中に子どもたちの歌声や音楽、表現が響き渡るようになるなかで、川嶋の精神的な葛藤はいつしか収まっていった。改めて考えてみると、川嶋が声を失い、声を回復していった過程は、高度経済成長が終わりを告げたあとの新しい時代の子どもたちに届く声を模索し、紡ぎ出すために必要な時間だったのかもしれない。

さらには、教師の専門的成長の観点から述べるならば、四谷第三小学校の平安な日々こそが、続く葛藤の伏線になっていた可能性がある。川嶋は、自らの著書のなかで、「ここ[四谷第三小学校]では初めの四年間は校内の授業研究はまったくないまますぎてしまった」(川嶋環『創造する授業Ⅱ―鳥小を離れて』一荃書房、2016、p.8)と記している。その後、教師たちの間で、授業研究を行いたいという機運が高まり、川嶋も理科の授業研究に挑戦している。しかしながら、研究授業のあと、子どもの学びを振り返りつつ、「何か不足している。『たいへん楽しい授業でした』『子どもと先生の意気がよく合っていた。』という参観者のことばをききながら、私はひとりで考えていた」(前掲書、p.22)と省察しているように、何か足りないと感じて自分の課題を薄々感じていた。川嶋は、傍からは順調に見える教職生活の中で、鳥小時代からの成長を実感できない自分に気づいていた。

そして、三鷹に移ったとき、これまでのもやもやとした違和感がとうとう大きな壁として立ち現れてきたのである。1974年に刊行された斎藤喜博の個人雑誌「開く」の第7集に「ひとりひとは、ほんとうによいものを持っているのに、それが学級の中でみんなかきけされてしまう。個と個がぶつかり合ってより高いものが出るのではなく、個がみんなつぶされてしまう。」(前掲書、p.25)と記して、「私はこの子どもたちを授業を通して、ほんとうの集団にきずきあげたいと、今思っている」(同上)と決意を表明したところで、声が出なくなったのであった。

この時、川嶋は、個と集団の関係を、もう一度、根底から組み直すことを突きつけられた。そして、子どもたちの喧噪のなかで声を失った川嶋が、子どもたちの学び合い、育ち合いのなかでその声を回復していった過程は、教師の生活と仕事が子どもたちとともに創造する学びの物語と深くかかわっていることをあらわしているのではないだろうか。

(五) 師との別れ

1981(昭和56)年、教師としてのあり方、生き方において川嶋が深い影響を受けてきた恩師の斎藤喜博がこの世を去った。川嶋は最後まで斎藤喜博と歩みをともにし、授業を教わ

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

り、教師としての成長を積み上げていった。斎藤というあまりにも大きな存在を失ったことで、川嶋は、教師としての真の自立を求められることとなった。48歳のことであった。

恩師の斎藤喜博が世を去ったのは、川嶋が声を回復した時期とちょうど重なっていた。そして、これらの出来事を契機として、川嶋の教職生活は、総仕上げである第四期に入っていくのであった。川嶋は、その時期のことを、次のように振り返っている。

「病気のあとの、教授学との関わりで、斎藤先生が死んでからね。もう頼る人がいなくなってからってというのが、四期に入るかな」(p.68)

もう頼る人がいなくなったということは、逆に言うならば、川嶋が若い教師たちから頼られる存在になる時が到来したということである。自らも子育てと仕事の両立に格闘し、さらには大病も経験した川嶋は、子どもを抱えた同僚の女性教師たちの生活に対して、深い共感と優しさをもち、その眼差しと言葉は温かかった。

「私そういう人〔幼い子どもを抱えた女性教師〕と一緒にになると『もう、とにかく早く帰るな』って、「子ども、その、あとのこと私が見るから」って、もう50代になったらほとんどそれ、そういう子育ての先生の支え合いをして」(③ p.64)

教師同士の支え合いは、世代を継承しながら、ケアされる側からケアする側へと若い教師たちを育ててきた。

「で、一言言うんです。『あなたが、私の年になった時、若い人にそうしてやるのよ』って」(③ p.64)

川嶋自身も、島小で斎藤校長や先輩の教師たちに支えられながら、子育てと教職生活を両立させたという経験をもっていた。インタビューの中でも島小時代に船戸咲子、金井栄子をはじめとする先輩教師たちがさまざまな局面において支えてくれたことを振り返りながら、「どんな苦しいことがあっても、そういう裏〔生活〕の面での支え合いってというのが自分を励ましてくれるんですね」(③ p.63)と語っている。そして、斎藤校長の在りし日の姿を懐かしみながら、「喜博先生って人は、授業には厳しいけど、先生の個人的な生活ってというのは、ほとんど支えましたからね」(③ p.66)と振り返っている。この時期、いつしか川嶋自身が、当時の斎藤校長や先輩教師の立場となり、若い教師たちを見守り、導く存在になっていた。

「そういうの〔先輩教師や斎藤校長の姿〕を見ているから、職員室の中でもあの人は困っているなっていうのがすぐわかるわけですよ（中略）今そういう年配の先生がいなくなっちゃっているんですよ。」（③ p.66）

川嶋は寂しそうにつぶやいた。川嶋がその退職後も学校にかかわり続けたのは、若い教師たちの支えとなる人間であり続けようという思いからだったのかもしれない。

（六）最後の授業

川嶋は、三鷹市立高山小学校において、声が出なくなるという大病を乗り越えて、同僚の教師たちとともに子どもたちの表現を引き出す教育実践を実現するに至った。その後、1988（昭和63）年に、同じく三鷹市内の三鷹第一小学校に異動する。そして、5年後の1994（平成6）年3月に、その三鷹第一小学校において定年退職を迎えている。

定年退職の年、6年生の担任であった川嶋は、自らの教職生活の最後を飾る授業として、そして卒業する6年生に送る授業として、坂本遼の「春」の詩を題材とした授業を行っている。年度末も押し迫った3月9日のことであった。

もともと理科教育を専門としていた川嶋にとって、教職生活の前半においては、文学の授業は、決して得意とするものではなかった。島小時代には斎藤喜博校長からもっと文学を読むようにとアドバイスされて、太宰治の作品を薦められたこともあった。

しかしながら、子どもを産み、育て、自らも大病を経験するなど、さまざまな人生経験を重ねるなかで、文学の世界を以前よりも深く理解し、強く求めるようになってきていた。そして、子どもたちにも文学の授業を通して人の心の深みや人生のせつなさを伝えたいと考えるようになっていたのである。

おかんはたった一人 峠田のてっぺんで 大きな空に 小ちやいからだを ぴょっくり浮かして 空いっぱいになく ちっと聞いてゐるやろで	春	坂本 遼
里の方で牛が じつと余韻に耳を 大きい美しい 春がまわってくる おかんの年がよる 目に見えるよう おかんがみたい	たんびに のが かなしい	

川嶋環のライフヒストリー（Ⅱ）

授業は、この詩のなかにある難しい言葉を子どもたちが発表し、その言葉の意味を一つひとつ確認したあと、「小っちゃいからだをびよっくり浮かして」いるのは、「おかん」なのか、それとも「雲雀」なのか、という問いをめぐって、川嶋が、子どもたちの意見を引き出し、響かせ合いながら、展開していった。最後に、おかんがみたいの「みたい」を漢字にするとどのような漢字がふさわしいかという問いに対して、子どもたちが「見たい」「観たい」「視たい」「看たい」「診たい」といった回答を出して、川嶋がいくつもの「みたい」が重なっているから、このようにひらがなで表現されているのではないだろうかとまとめて、授業は締めくくられている。

川嶋の深い教材研究に支えられて、6年生の子どもたちが真剣に教材に向き合い、子どもたちの発言が響き合う授業であった。この授業を集大成として、川嶋の38年間に及んだ教職生活はひとまず幕を閉じることとなった。

おわりに

利根川のほとりの小さな村の学校であった島小で始まった川嶋環の教職生活は、東京・三鷹の小学校で幕を閉じた。しかしながら、川嶋の教師としての歩みは、ここで終わったわけではなかった。定年退職後も自宅を開放して研究会を主催するとともに、20年以上にもわたって、全国津々浦々の小学校において示範授業を行い、授業づくりの指導を行ってきた。さらには、立教大学、宮城教育大学、東京経済大学などで、大学の教職課程の講義や講演を担当し、教育現場と大学の双方において、教師教育の仕事にたずさわってきた。これらの場所で行われてきた川嶋の授業は、退職後であっても活動的で瑞々しく、今の時代を生きる子どもたち、大学生たちをも魅了してきた。

川嶋の授業の底流に流れるものは、子どもへの深い信頼と、自らの学びに対する真摯さであった。それは川嶋の人生そのものでもあった。戦災孤児を自宅に連れてきて一緒に住まわせるような温かい家庭で生まれ育ち、自らも教室の子どもたちと分け隔てなく接してきた。誰に対しても、自らの学びの準備の手を抜くことはなく、その時々で最高のものを投げかけてきた。それだから、普段、教室でもっとも学びに困難を抱えている子どもたちが真っ先に川嶋に惹きつけられ、学びに夢中になった。定年退職後の川嶋は、すべての子どもに大きな可能性があるとして綴った『君の可能性』という斎藤喜博の著書のメッセージを、全国の小学校で実践として実現し、子どもたちと教師たちに「君の可能性」とともに「教育の可能性」を示し、多大な勇気を与えてきた。

振り返って考えてみると、40代の病気によって、川嶋の教職生活は、定年退職まででは、十分にはその潜在的な可能性を展開し得なかったように思われる。そして、定年退職後、60歳から80歳を超えてまで授業の探究を続けたことによって、川嶋の教師としての思想と実

践はより深く、広がりのあるものとして、その姿を明らかにしたといえる。そのように考えると、この研究ノートは、まだ川嶋の教職生活の途上までしか照射できていないことになる。

それでも、ひとまず二回の研究ノートを通して、川嶋環の人生を、川嶋自身の語りを中心にしながら、川嶋の歩みに戦後の教育の歴史を重ねることによって、再構成してみた。川嶋の波瀾万丈の人生の力動、人間の弱さや悲しみを知るがゆえの底抜けの明るさ、誰にも分け隔てなく愛情を注ぐ器の大きさ、こうした川嶋の歩みの豊かさを汲み尽くすには、まだまだ遠い道のりがあることを重々承知しながらも、次に続く研究の礎石として、この研究ノートを公刊したい。

(謝辞)

本研究は、前編と同じように、川嶋環先生の教師としての日々の弛まぬ努力と緩みのない人生、そして惜しめない語りに多くを負っている。今回の度重なるインタビューにおいても、後進の学びのために多大な時間を割いて、貴重な経験を語って下さった。記して、厚く感謝したい。

引用文献

川嶋環『創造する授業Ⅱ—島小を離れて』一荃書房、2016。

斎藤喜博『君の可能性—なぜ学校に行くのか』ちくま文庫、1996（初出は1970）。